

2-III-21

多重色素標識によるラット青斑核アミンニューロンの投射様式の検討。

永井利三郎, 木村 宏, 今本喜久子,
前田敏博

(滋賀医大・一解)

青斑核アミンニューロンは、大脳皮質、小脳、脊髄に広汎な投射線維を送っているが、同一細胞から2カ所以上の異なる領域に投射線維が送られているかどうかについては未だ確証は得られていない。今回我々は蛍光色素を用いたアミンニューロンの多重標識法を確立し、ラット青斑核について投射様式を検討した。蛍光色素としてはPrimulin, DAPI, Evans Blueを用いた。150~180gの雄ラットの大脳皮質、小脳、脊髄に上記色素を別々に1~2 μ l注入、また大脳皮質を前頭皮質、頭頂皮質、後頭皮質に分けて同様に0.5~1 μ l注入した。標本作製、観察は別報の通りである。大脳皮質-脊髄、小脳-脊髄に注入した例ではほとんど別々のニューロンが標識されたが、大脳皮質-小脳に注入した例で、一部二重標識細胞が見られた。大脳皮質内で別々に注入した例では、多くの細胞に2重標識がみられた。

2-III-22

活性アミンの免疫組織化学的証明の試み

根本則道, 川生 明, 岡野匡雄,

志方俊夫

(日本大・医・第一病理)

活性アミンの免疫組織化学的証明は特異抗体作製の困難さに加えその不安定な抗原性故に現在までGROTAらの報告を含め極めて乏しいのが実状である。

今回我々はインドールアミンの免疫組織化学的証明を試みラット松果体およびカルチノイドを含めたAPUD系に由来すると考えられる腫瘍を用い各種固定液および包埋法に關し比較検討を行ない若干の知見を得たので報告する。方法) 5-hydroxytryptamine, N-Acetylserotonin (Sigma)にcarrier proteinとしてBovine serum albumin (BSA)をGROTAらの方法に準じcouplingし水で透析後凍結乾燥、これらhapten-BSA complexを10mg/mlの割合で生食に溶解した後当量のFreund complete adjuvantを加えホモチネートしたものを抗原として1mlを家兔背部に免疫し抗血清を得た。結果) Ouchterlony法ではBSA吸収後の抗血清はSerotonin-BSAとの間に沈降線を形成したがBSAとの間には交叉反応性は認められなかった。またラット松果体凍結切片における蛍光抗体法では弱いながら松果体実質細胞に特異蛍光を認めた。